

F-15 最近の家庭機能の変化について

ノートルダム清心女子大家政 加勢川 堯

目的 高度経済成長下の家庭機能は次のよう基調の移りかたで、人々でいるといわれる。
①所得の増大化、②自由時間の増大化、③消費生活パターンの変化、④核家族化と人口老
令化等である。これらの基調のもとで家庭機能の質的変化がどのようになっているかを明ら
かにしたい。この場合、「手段的機能」といって「表出的機能」の二面において考へたい。

方法 総理府統計局『家計調査年報』（昭和38年～48年）、日本放送協会放送世論調査
所『国民生活時間調査』（昭和35年～48年）をとり統計処理を中心とする。

結果 次の諸点が指摘できる。

(1) 家庭経済において

手段的機能型（生命の立身型）より表出的機能型（精神の立身型）へ。つまり、「雑費」
支出中心に家族員の「文化」、 「教育」促進の重視へ。

(2) 生活時間において

手段的機能型（拘束時間型）より表出的機能型（休養、交際、レジャーの自由時間型）へ。

(3) したがって家政という組織の役割創造関係も、脅迫、交換関係型（いわゆる手段的機能
型）から、統合的關係型（いわゆる表出的機能型）へと変化しているともみとらる。

(4) このように、最近の家庭機能が「表出的機能型」への転換を強めているといふことは、
改めて家政現象の本質を問う一つの契機を提供するものとして重視してらるべきであらう。